# 24　『医学天正記』異本類の比較研究（第2報）

天野　陽介[1,2]，小曽戸　洋[1]，町　泉寿郎[2]
[1]北里大学東洋医学総合研究所，[2]二松学舎大学

演者らは第110回本学会総会において『医学天正記』異本類の病門・症例数を調査，比較研究し報告した．このたび，武田科学振興財団杏雨書屋に所蔵される同書の異本を調査したので報告する．

『医学天正記』は曲直瀬玄朔（1549～1631）の著になる医案集（治験録）である．患者情報（名，年齢など），症状，処方を記した治験を集録し，道三流医術の具体的運用法が残される資料として高い評価を受けている．当時の要人の症例をも含むことから史学の文献としても重要視される．同書には刊本や写本として種々の異本が伝存．その多くは治験を病門に分かち，参照の便を図っている．

先の調査報告では次の9書について報告した．①『医学天正記』上下2巻（寛永4年・1627版），②『延寿配剤記』4巻（寛文10年・1670刊），③『医学天正記』乾上下・坤〔『改訂史籍集覧』（明治35年・1902）収〕，④『道三先生処剤座右』（写本，矢数道明蔵），⑤『増続天正記』（写本，北里大学図書館飯山文庫蔵），⑥『道三先生医案集』（写本，東京大学総合図書館蔵），⑦『天正日記極秘書』（写本，京都府総合資料館），⑧『道三名誉療治記』（写本，京都大学附属図書館蔵），⑨『治験録』（写本，曲直瀬陽造氏が東京国立博物館に寄託中）．

以下，その後調査した書について報告する．

⑩『一溪道三手書　配剤録』不分巻．写本，成書年不詳．福井崇蘭館旧蔵．冒頭には53条からなる医論が記される．12丁から診療録を集録．症例は356例が記載されている．本書は病門に分かたれておらず，およそ編年的に編まれているようである．記載は天正6年の症例から始まるが，文禄までは日付が前後して記載されている．古いものでは天正3年の診療記録がある．慶長以降は順次年を追って集録．慶長10年まで続き，その後は年の記載がないが日付にしたがうと3回年が変わるようである．集録症例は他書に見えるものが多いが，本書はほとんどの症例に日付の記載がある．貴重な情報を残している書といえよう．また，東京大学史料編纂所には，本書を福井成功より借り受け明治36年に謄写したものが伝わっている（『玄朔道三配剤録』）．

⑪『医学天正記　異本』不分巻．写本，成書年不詳．病門には分かたれていない．340の症例が記載される．一部前後するが，記載順，記載症例ともに⑩『一溪道三手書　配剤録』と同じ．しかし，日付を付した症例は⑩に比すと少ない．本書と⑩とは，密接な関係にあると見てよいだろう．本書には⑩半葉に相当する脱文も見受けられ，⑩よりは後に成立したと推定される．

⑫『意伝鈔』3巻．写本，成書年不詳．本書は，玄朔の原著になる処方集『常山方』に類する内容をもつ．57病門に分けられ，本文は漢字仮名交じりで書かれる．本紙余白には，本文と同筆と思われる書き入れが多くある．その内容は漢方処方に関わるものと，『医学天正記』異本類に関わる症例の記載からなる．一部には抄物で見られるゾ体が用いられ，また「私」「延寿院」「玄冶」などの語も見受けられる．曲直瀬流に関わる者による写本と推定される．この書き入れに記される症例は432例．『意伝鈔』本文の病門に関連したものを各所に記す．そのほとんどが①～⑪に見える症例であるが，中にはいずれの書にも見られれない日付を記した症例もあり，他書との詳細な比較を含めたさらなる調査が必要と考えられる．

本研究は財団法人武田科学振興財団「2010年度杏雨書屋研究奨励」の一環として行った．